

枠付け類型論における様態の種類が与える構文選択への影響

—タガログ語のデータから—

山本恭裕

京都大学大学院

キーワード：タガログ語、オーストロネシア語族、枠付け類型論、移動様態表現

1 はじめに

本研究の目的は、複雑な移動事象を構成する様態の種類の違いが、移動の経路を表す言語表現（以下「経路」とする¹）の実現位置にどのように影響するのかを、タガログ語のデータに基づいて検証することである。移動事象を構成する各意味要素は、言語ごとに異なる形態統語的単位によって表現される (Talmy 1985)。Talmy (1991; 2000) は移動の中核的な意味要素である「経路」が節のどの構成素によって表されるかに基づき、2つの言語類型を提案している。つまり、「経路」を主に主動詞（語根）によって表現する「動詞枠付け型言語 (verb-framed language)」と、「経路」を主に付随要素³によって表現する「付随要素枠付け型言語 (satellite-framed language)」という2類型である。

しかし、近年の複数の研究 (Croft et al. 2010; Beavers et al. 2010) が、1つの言語内における類型的多様性を報告している。つまり、ある言語が移動を表現するとき、異なる類型タイプに特徴付けられる複数の構文が使用可能ということである。こうした報告例と合致して、タガログ語もどちらの

¹ 経路、様態といった移動事象の意味要素の定義は第2節で扱う。

² タガログ語はオーストロネシア語族西マラヨ・ポリネシア語派に属し、フィリピン共和国ルソン島中部マニラ首都圏およびその周辺で話されている。述部先行型であり、典型的な他動詞構文における語順は VSO である。ただし、人称代名詞は必ず節の2番目の位置に現れる前接語 (enclitics) であり、それらが述語に先行する位置を占めるケースも存在する。また、本言語は複雑な動詞形態論を持ち、ヴォイス、アスペクト、動作主性に関して屈折する。特に複雑な体系であるヴォイスはフォーカスシステムと呼ばれ、形態的に行為者ヴォイス (-um-/mag- など)、被動作者ヴォイス (-in-)、場所ヴォイス (-an)、その他ヴォイス (i-) の4つの範疇が区別される。本稿では、タガログ語が対称的なヴォイス体系 (Symmetrical voice system: Himmelmenn 2005) を持つという仮説を採用する。つまり、それぞれのヴォイス範疇の間に派生関係はなく、項の降格なども生じていないと考える。格配列については、行為者ヴォイスの場合、行為者 (actor) が NOM によって、被行為者 (undergoer) が GEN によって表示される。その他3つのヴォイスにおいては、行為者が GEN によって、被行為者が NOM によって表示される (意味役割については Van Valin 2005; Van Valin and LaPolla 1997 を参照のこと)。

³ 付随要素 (satellite) に対する Talmy の本来の定義は “the grammatical category of any constituent other than a noun-phrase or prepositional-phrase complement that is in a sister relation to the verb root. It relates to the verb root as a dependent to a head.” (2000: 102) である。しかし、Talmy (2009) では、この用語は動詞と姉妹関係でない前置詞や後置詞も含んでいる。本稿では、後者の定義を採用し、主動詞に従属する要素を付随要素と呼ぶ (詳しい議論については Matsumoto (2003) も参照)。

類型パターンでも移動事象を描写しうる（例文中の太字は経路要素を、斜体は様態要素を表す。また下線は主動詞⁴を表す）。

(1) Satellite-framed⁵

L < um > *utang* ang lata **pa-labas** ng kueba
 PFV:AV:float NOM can PA-out GEN cave
 ‘The can floated out of the cave.’

(2) Verb-framed

Pa-lutang na ***l*** < um > ***abas*** ang lata ng kueba.
 PA-float LK PFV:AV:go.out NOM can GEN cave
 ‘The can floated out of the cave.’

(1) と (2) の両方の例において、「缶が浮かんで洞窟から出る」という同一の事象が描写されているが、その表現の仕方は異なる。(1) の例では、経路 *labas* ‘out’ は接辞 *pa-* (Schachter and Otones 1972) を付加され、移動様態（以下では単に「様態」と呼ぶ）を表す主動詞 *lumutang* ‘to float’ に従属する構成素として表されている。一方 (2) の例では経路は主動詞で表され、様態が従属要素として表現されている。すなわちタガログ語では経路と様態が主動詞の位置において競合関係にあると言え、話者はどちらの要素を主動詞で表すか（あるいはどちらを付随要素で表すか）を選択する必要があることを意味する。

こうした点を踏まえ、本研究では次の 2 つの問題を検証する：まず、(I) 複雑な移動事象を表現する際、タガログ語話者は動詞枠付け型と付随要素枠付け型のどちらの構文による描写を選好するか、また、(II) 何かしらの選好が存在する場合、その選好は異なる種類の移動事象において一貫しているのかという 2 点である。これら 2 つの課題に対して、映像描写タスクにより収集した自発的な発話データと、作例に対するタガログ語母語話者の文法性判断に基づいて検証を行う。

異なる種類の移動事象という点に関して、より具体的には、本研究は異なる様態の種類を含む移動事象に焦点を当てる。本研究では移動の原因となるか否か、という点において様態を区別する。そして結論として次のことを示す：タガログ語では、移動の原因となる様態は主動詞あるいは付随要素のどちらでも実現可能であるが、主動詞で表現されることが好まれる。そのため経路を付随要素として表現する傾向が強い（付随要素枠付け型）。一方、移動との因果関係が薄い、あるいはそれを認めにくい様態は、文法的に主動詞の位置に生起することができない。従って、そのような様態を含む移動事象は動詞枠付け型構文や従属接続を含む複雑文によって描写される。この点を言い換えると、タガロ

⁴ 本稿におけるタガログ語の主動詞の認定については、3.1 で詳しく議論する。

⁵ 本稿の例文の表記は、基本的にタガログ語の正書法に従う。正書法では、軟口蓋鼻音 [ŋ] は ‘ng’ により表される。また属格 [nan] は ‘ng’ と表記される。そのほか、正書法で声門閉鎖音はハイフン ‘ ’ により表記されるが、本稿では形態素境界を表すものと区別するために国際音声記号 ‘?’ を用いる。なお、語頭及び語末の声門閉鎖音は正書法にならい明示しない。

グ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、移動の原因となる様態ほど主動詞の位置を占めやすい傾向があると言える (表1)。

表1 様態の種類と生起位置

移動の様態の種類	統語的な生起位置
移動の原因となる様態	主動詞が好まれる
移動の原因でない様態	主動詞に依存する付随要素、複雑文の一方の節の主動詞 (主動詞は不可)

本稿は次の通りに構成される。第2節では、様態という概念が Talmy (1991; 2000) の枠付け類型論においてどのように位置づけられるかという点と、さらにその下位分類に関して論じる。第3節では、タガログ語の移動事象描写に使用される構文の特徴を概観し、さらに当該類型論において重要となる、タガログ語の節主要部の認定について議論する。第4節では、データ収集に使用した映像描写実験について説明し、その実験結果および発見を報告する。第5節では、異なる種類の様態を含む移動事象の描写について、タガログ語話者の文法性判断に基づき議論を行う。第6節で2つの問題に対する研究を纏める。第7節で本研究を結論づける。

2 様態とその下位分類

Talmy (1991; 2000) の類型論は、複雑事象の核となる「枠付け事象」(Framing event) が各言語でどの様に表現されるかに着目することから、「枠付け類型論」(Framing typology) と呼ばれる。枠付け事象は、複雑事象の時間的輪郭を規定するものと定義され、本研究で議論する移動事象においては、経路要素がこれにあたる。Talmy の議論における複雑事象は、こうした枠付け事象に加え、それを補足する「共事象」(Co-event) などから構成されるものと規定される。本研究が注目する様態はこの共事象の1種と見なされ、次のように特徴付けがなされる：

“In the Manner relation, ... the Co-event co-occurs with the Motion event and is conceptualized as an additional activity that the Figure of the Motion event exhibits—an activity that directly pertains to the Motion event but that is distinct from it. In this conceptualization, the Co-event can “pertain” to the Motion event in several ways, such as by interacting with it, affecting it or being able to manifest itself only in the course of it.” (Talmy 2000: 45)

Talmy が述べているように、この定義の下では、様態として機能する共事象と移動事象の間にくつかりの関係性があり得る。たとえば階段を走って上がる移動の場合、移動者の走る行為が上方向への位置変化を生じさせており、走る行為を止めれば移動そのものも止まる。つまり、様態と移動は明確に因果の関係にある。一方、人間がくるくる回りながら坂をのぼるといった移動の場合、くるくる回る行為は移動に付随するものであり、移動の原因となっているとは考えにくい。

このような違いに関連して、Allen et al. (2007) は前者を本来的な様態 (Manner-Inherent)、後者を偶発的な様態 (Manner-Incidental) と呼び、成人の英語話者がこの区別に敏感であることを述べている。Allen et al. はアニメーションを用いた発話実験を行い、その結果、成人英語話者は本来的な様態を含む移動について、偶発的な様態を含む移動よりも有意に高頻度で単節の (付随要素枠付け型) 構文を用いて描写したことを報告している。またその一方で、偶発的な様態を含む移動は、従属節を含む複文や複数の文など、統合度の低い構文でより頻繁に描写されたという。

様態の本来性/偶発性という区別は、Croft et al. (2010) における様態と経路の組み合わせの典型性や、Talmy (2000) における付随 (Concomitance) と様態 (Manner) の区別ないし連続性と類似した概念であると考えられる (他にも Wienold 1995 や Slobin 1997; 2000 を参照)。Talmy は、付随事象が移動を補足する例として *She wore a green dress to the party* や *I whistled past the graveyard* を挙げている (2000: 46)。これらの描写において、緑色のドレスを着用することや口笛を吹くことが移動の原因となっているとは考えにくい。

また、Allen et al. (2007) の研究に関して注意すべきこととして、彼らの議論が構文の「選好」についてのみ行われているという点を指摘できる。ある事象の描写に、ある特定の構文が使用されなかったとき、他の構文がより好まれたという場合と、その構文が使用できなかったという場合がありうる。そのため本研究では、前述した2つの様態 (あるいは様態と付随) を区別した上で、タガログ語話者の構文選好と生起可能性の両方を検証する。

3 移動事象の描写に使用される構文の特徴

ここでは、移動事象の描写に関わるタガログ語の構文を概観する。まず、そのような構文として冒頭の例 (1) を再び以下で提示する。本構文ではヴォイス接辞を有する動詞と接頭辞 *pa-* を付加された語根を1つずつ含むものが存在する。この構文において、経路要素はヴォイス接辞を付加されて、あるいは接辞 *pa-* を付加されて実現しうる。本稿ではこの構文を *pa-* 構文と呼ぶこととする。

- (1) L<um>utang ang lata **pa-labas** ng kueba
 PFV:AV:float NOM can PA-out GEN cave
 ‘The can floated out of the cave.’

この構文では、*pa-* により複数の経路を表示することが可能である (3)。また (4) や (5) が例示するように、動詞と *pa-* を付加された要素がそれぞれ異なる行為主体を取ることもありうる。

- (3) Nag-lakad si Maria **pa-tawid** ng kalsada **pa-punta** sa akin.
 PFV:AV-walk P.NOM Maria PA-cross GEN street PA-go LOC 1SG.OBL
 ‘Maria walked across the street to me.’
- (4) Ini-hagis ng lalaki ang lata **pa-labas** sa bintana.
 PFV:CV-throw GEN man NOM can PA-go.down LOC window

‘The man threw the can out of the window.’

- (5) H<in>ila-∅ niya ako pa-tayo.
 PFV:pull-PV 3SG.GEN 1SG.NOM PA-stand.up
 ‘He pulled me to my feet.’

2 つ目は、リンカー (linker; LK) を用いた構文である。タガログ語のリンカー *na* (先行する語が母音で終わる場合は =*ng*) は抽象性の高い文法要素であり、その前後の要素のあいだに何らかの文法的関係が存在することを示す。以下が例示するように、このリンカーが複雑移動などの並行事象を表現するのにも用いられる (長屋 2016; Schachter and Otnes 1972)。以下では本構文を並行事象構文と呼ぶ。

- (6) Nag-ma~madali = ng l<um> abas si Ricky.
 IPFV:AV:hurry = LK PFV:AV:go.out P.NOM Ricky
 ‘Ricky rushed out of the room.’
- (7) <Um> i~iyak siya = ng <um> alis sa kuwarto.
 AV:IPFV:cry 3SG.NOM = LK PFV:AV:leave LOC room
 ‘S/he left the room crying.’

この構文は、*pa-* 構文と異なる文法特徴をいくつか有する。まず、上の例にわかるように、この構文にはヴォイス接辞を付加された動詞が2つ見られる。第2に、次の (8) のように、そのうち一つの動詞は常に未完了形のアスペクトで実現しなければならないという制約を持つ。さらに、2つの動詞の行為者は同一でなければならない (9)。

- (8) *Nag-madali = ng l<um> abas si Ricky. (cf. 6)
 PFV:AV:hurry = LK PFV:AV:go.out P.NOM Ricky
 ‘Ricky rushed out.’
- (9) *Nag-lu~luto si Nanay na nag-ba~basa ako.
 IPFV:AV:cook P.NOM mother LK IPFV:AV:read 1SG.NOM
 ‘My mother cooked while I was reading.’

ここまで概観した2つの構文を組み合わせたことも可能である。この点を例 (10) で例示する。

- (10) T<um> a~takbo = ng l<um> abas ang lalaki pa-punta sa akin.
 IPFV:AV:run = LK PFV:AV:out NOM man PA-go LOC 1SG.OBL
 ‘The man ran out toward me.’

こうした構文に加えて、タガログ語には経路を表す前置詞もいくつか存在する。 *sa* ‘to, at, from’; *mula* ‘from’; *hanggang* ‘reaching’; *buhat* ‘from’; *galing* ‘originate from’ などがそれである。こうした空間的前置詞を含む移動表現は以下のようなものである。

- (11) Nag-lakad ako **mula** sa bahay ko **hanggang** sa kampus.
 PFV:AV:walk 1SG.NOM from LOC house 1SG.GEN reaching LOC campus
 ‘I walked from my house to the campus.’
- (12) P<um>unta siya sa airport **galing** sa TriNoma.
 PFV:AV:go 3SG.NOM LOC airport originate.from LOC TriNoma
 ‘Jenn went to the airport from TriNoma.’

3.1 主動詞の認定

Talmy (1991; 2000) の類型論では、経路を主動詞か付随要素のどちらで表現するか問題となるため、対象言語の各構文において、主動詞をどのように認定するかという点を明らかにしておく必要がある。本稿では、文が表現する事象全体のアスペクト的性質を決定する動詞を主動詞と認定する。たとえば、以下の 2 つの例は、文全体が既に終結した事象を表している。従って上の基準により、完了アスペクトの標示を受けている動詞が主動詞となる。(13) のような *pa-* 構文においては、アスペクト標示を唯一受けている *lumakad* ‘to walk’ が主動詞と見なされる。一方、(14) のような並行事象構文では、アスペクト標示を受けている二つの動詞のうち *umuwi* ‘to go home’ が主動詞となる。

- (13) *L<um>akad* si Mhawi **pa-akyat** sa bundok.
 PFV:AV:walk P.NOM Mhawi PA-climb LOC mountain
 ‘Mhawi walked up the mountain.’
- (14) *K<um>a~kanta = ng <um>uwi* si Lucy.
 IPFV:AV:sing=LK PFV:AV:go.home P.NOM Lucy
 ‘Lucy went home singing.’

しかしながら、全てのケースでこの基準が適応できるわけではない。(15) のように、文により表現される事象が進行中の場合、両方の動詞が未完了アスペクトの標示を受ける。この場合、どちらが節の主要部であるか判断できない (他の基準については長屋 2016 を参照のこと)。言い換えると、主動詞は必ずアスペクト標示を受けるが、アスペクト標示を受けているからといって主動詞であるとは言えない、ということになる。

- (15) *K<um>a~kanta = ng <um>u~uwi* si Lucy.
 IPFV:AV:sing=LK IPFV:AV:go.home P.NOM Lucy
 ‘Lucy is going home singing.’ or ‘Lucy is singing while going home.’

4 研究1：構文選好

4.1 実験

本研究ではまず、ビデオ刺激を用いてタガログ話者から移動事象の描写データを収集した。実験は2011年の11月から12月に実施された。

被験者として、マニラ首都圏出身の7人のタガログ話者（年齢：20代から40代；女性4人と男性3人）の参加を得て、人やものが移動する10個のビデオクリップを各々に描写してもらった。刺激映像は筆者が作成したもので、9個の自律移動と1個の使役移動から構成される。テスト段階は、移動を含まない練習用の映像から始まる。表2は、ビデオクリップで描かれる事象をリストしたものである。これらは事象の理想化された特徴に過ぎないことに留意されたい。

実験参加者にはラップトップのディスプレイ上で、各クリップのあとの15秒の休止時間において映像の描写を1、2文で行うようにと指示される。実験参加者には映像だけでなく、音声情報もヘッドフォンを通して与えられる。

表2 刺激映像の内容

#	Event
P-1	男性がボトル飲料を飲んでる
M-1	缶が坂を転がり落ちる
M-2	男性がフェンスをよじ上る
M-3	2人の男性と1人の女性が走ってビルから出る
M-4	女性が階段を歩いて降りる
M-5	女性が歩いてカメラの前を横切る
M-6	男性が横断歩道を歩いて渡る
M-7	男性が塀から飛び降りる
M-8	ボールが跳ねながら階段から落ちる
M-9	ボールが壁に当たって跳ね返る
M-10	男性が台車を押してカメラに向かって歩く

Notes: P- practice; M- motion event

4.2 結果

実験の結果として、タガログ話者は動詞枠付け型構文よりも、付随要素枠付け型構文を好んで使用することが明らかとなった（図1）。話者が刺激映像で描かれた経路と様態の両方に言及する場合、様態を主動詞の位置で表し、経路を付随要素で表現するケースが多かった（78%）。そして、従属接続や等位接続など、異なる節で経路と様態が表現された割合が13%であり、経路が動詞で、様態が付随要素で表現された割合が9%であった。

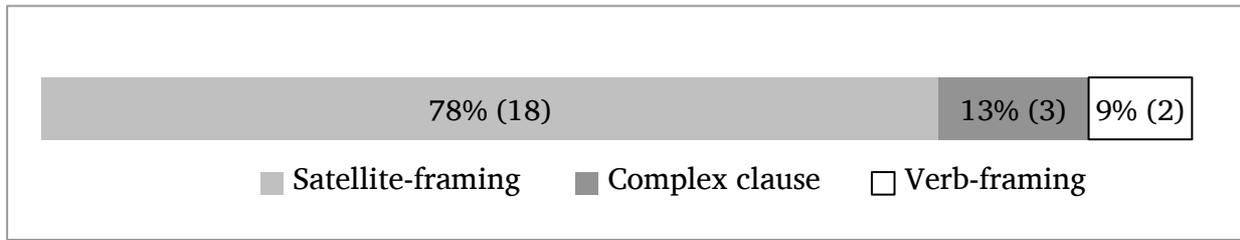


図1 各類型パタンの割合 (トークン数)

ここからは具体的なデータを見ていく。まず、全体で 18 例見られた付随要素枠付け型構文を観察する。次の例において、経路は接辞 *pa-* を付加された付随要素として実現している。

- (16) May mga tao = ng nag-ma~madali **pa-baba** ng hagdan.
 there.be PL person = LK IPFV:AV:rush PA-go.down GEN stairs
 ‘There is a person who is rushing down the stairs.’ (M-3)
- (17) Nag-la~lakad yung babae **pa-baba** ng hagdan.
 IPFV:AV:walk DIS.NOM woman PA-go.down GEN stairs
 ‘The woman is walking down the stairs.’ (M-4)
- (18) T<um>alon **pa-baba** yung lalaki.
 PFV:AV:jump PA-go.down DIS.NOM man
 ‘The man jumped down.’ (M-7)

次の筆者の作例 (19) が示すように、これらの例では経路と様態の位置を入れ替えて、経路を主動詞により、様態を接辞 *pa-* の付加により表現することも可能である⁶。従って、話者たちは動詞枠付け構文による描写が不可能だったわけではなく、付随要素枠付け型の構文を好んで使用したと言える。

- (19) *Pa-talong* **b<um>aba** yung lalaki. (cf. 17)
 PA-jump.LK PFV:AV:go.down DIS.NOM man
 ‘The man jumped down.’

また、以下の例 (20)、(21)、(22)、(23) では、経路が前置詞により表現されている。さらに (24) では、2つの付随要素により経路が表現されている。

⁶ 入れ替えにより表現の自然さや文法性が変化することはこれらのデータでは見られないが、実験には参加していない1人のインフォーマントから、(19)のような表現はより教科書的な印象を受けるというコメントももらった。彼女によると、日常会話では(18)のような構文のほうが口語的・一般的なように感じるとのことであった。しかし、全ての被験者がこれと同様の印象あるいは直観を持っているわけではなかった。

- (20) *T<um>alon* ang lalaki **mula** sa mataas na lugar.
 PFV.AV:jump NOM man from LOC high LK place
 ‘The man jumped down from the high place.’ (M-7)
- (21) *L<um>undag* siya **sa** bakod.
 PFV.AV:jump 3SG.NOM LOC fence
 ‘He jumped off the fence.’ (M-7)
- (22) Doon *t<um>alsik* yung bola **sa** pader.
 there PFV.AV:splash DIS.NOM ball LOC wall
 ‘The ball splashed to the wall.’ (M-9)
- (23) May *t<um>albog* na bola **mula** kung saan.
 there.be PFV.AV:bounce LK ball from somewhere
 ‘There was a ball coming from somewhere and it bounced back.’ (M-9)
- (24) *T<um>a~takbo* sila **pa-labas galing** sa isa=ng building.
 IPFV.AV:run 3SG.NOM PA-out originate.from LOC one=LK building
 ‘They are running out of a building.’ (M-3)

次に、描写に使用された動詞枠付け型構文を見る。本実験での使用例は僅か2例であった。うち1つは、(25)の並列事象構文である。

- (25) May **na-laglag** na bola=ng *t<um>a~talbog* sa hagdan.
 there.be PFV.POT:fall LK ball=LK IPFV.AV:bounce LOC stair
 ‘There was a ball bouncing off the stairs.’ (M-8)

もう1つの動詞枠付け型構文は(26)の例である。この例文で描写されている、ペットボトルを掴むという事象が道を渡る事象の原因となっていることを想定することは難しい。つまり、この事象は偶発的な様態と言える。(26)で表現されている事象を付随要素枠付け型構文で表現することは難しく、この点で本節でみた他の例とは異なる。

- (26) **T<um>a~tawid** siya sa kalsada *hawak* ang isa=ng bottle.
 IPFV.AV:cross 3SG.NOM LOC street hold NOM one=LK bottle
 ‘He is crossing the street holding a bottle.’ (M-6)

本実験において出現した様態表現は、本来的な様態として機能しているものがほとんどであった。それを(27)にリストする。

- (27) *gulong* ‘to roll’, *takbo* ‘to run’, *lakad* ‘to walk’, *lundag* ‘to jump’, *hira* ‘to pull’, *madali* ‘to rush’,
talon ‘to jump’, *talbog* ‘to bounce’, *talsik* ‘to splash’, *tulak* ‘to push’

一方、偶発的な様態は (26) の 1 例しか観察されなかった。この例において、偶発的な様態が付随要素として実現したという点は興味深い。この点をさらに検証するため、次節ではそうした種類の様態と経路の組み合わせがどのように表現されるのかを見る。

5 研究 2：異なる様態のコード化

次の例のように、タガログ語では経路を主動詞で表し、様態を付随要素で表すことが可能であり、さらに 2 要素の統語的ステータスを入れ替えることも可能であるということを前節までで確認した⁷。

- (28) a. *Pa-takbo*=ng **p<um>asok** sa kuwarta ang lalaki.

PA-run=LK PFV.AV:enter LOC room NOM man

‘A man ran into the room.’

- b. *T<um>akbo* ang lalaki **pa-pasok** sa kuwarta.

PFV.AV:run NOM man PA-enter LOC room

‘A man ran into the room.’

- (29) a. *Pa-kandirit* na **<um>akyat** ng hagdan si Leo.

PA-skip LK PFV.AV:climb GEN stair P.NOM Leo

‘Leo skipped up the stairs.’

- b. *K<um>andirit* si Leo **pa-akyat** ng hagdan.

PFV.AV:skip P.NOM Leo PA-climb GEN stair

‘Leo skipped up the stairs.’

前節の実験結果から、2 つの類型パタンのどちらも使用可能な場合、タガログ語話者が好んで付随要素枠付け型構文を選択するということが明らかになった。しかし、前節で観察された付随要素枠付け型構文の主動詞は *lakad* ‘to walk’ や *takbo* ‘to run’ など、移動を引き起こす典型的な様態がほとんどであった。そのため、移動を引き起こす典型的なもの以外の様態と経路の組み合わせにおいても、タガログ語話者が同様の構文選好を示すのかという点が未解決である。本節では、移動の原因とならない偶発的な様態と経路の組み合わせがどのように表現されるかを見て行く。本節で検証する経路 (30) と様態 (31) は以下のものである。

⁷ 1 人のインフォーマントは (28)、(29) の 2 例において (b) の方、つまり付随要素枠付け型の構文の方がより一般的であるとコメントした。しかし注 4 で述べたように、このような直観を全ての話者が持つ訳ではない。

(30) **Path** (経路)

tawid ‘to cross’, *labas* ‘to go out’, *baba* ‘to go down’, *pasok* ‘to enter’, *punta* ‘to go’, *akyat* ‘to ascend’

(31) **Manner** (様態)

sayaw ‘to dance’, *tawa* ‘to laugh’, *sigaw* ‘to shout’, *ikot* ‘to spin’, *kain* ‘to eat’, *dabog* ‘to stamp’

この研究では、これらの経路と様態を組み合わせた作例の文法性判断を、タガログ語話者への面談調査を行って確認した。結果としては、これらの様態は節の主動詞として実現できないことがわかった。この事実は、タガログ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、言語そのものを分類する Talmy の類型論をそのままこの言語に適用することはできないことを意味する。

次の例が示すように、*sayaw* ‘to dance’ と *tawid* ‘to cross’ の組み合わせでは、経路が主動詞として実現する。様態の方を主動詞として表現した場合、非文法的と判断される。

(32) a. *Pa-sayaw* siya = ng **t<um>awid** sa daan.
 PA-dance 3SG.NOM = LK PFV.AV:cross LOC road
 ‘S/he crossed the road dancing.’

b. **S<um>ayaw* siya **pa-tawid** sa daan.
 PFV.AV:dance 3SG.NOM PA-cross LOC road
 ‘S/he crossed the road dancing.’

並行事象構文でもこの組み合わせを表現できるが、ここでも経路が主動詞の位置を占める。

(33) a. *S<um>a~sayaw* siya = ng **t<um>awid** sa daan.
 IPFV.AV:dance 3SG.NOM = LK PFV.AV:cross LOC road
 ‘S/he crossed the road dancing.’

b. **S<um>ayaw* siya = ng **t<um>a~tawid** sa daan.
 PFV.AV:dance 3SG.NOM = LK IPFV.AV:cross LOC road
 ‘S/he crossed the road dancing.’

次の経路と様態の組み合わせは *ikot* ‘to spin’ と *pasok* ‘to enter’ である。以下の例が示すように、この組み合わせの描写においても付随要素枠付け型の構文は使用できない。なお、ここでは (34a) の並行事象構文のみが使用可能である。(35b) では経路が主動詞で表されているが、*pa-* 構文がここでは非文法的と判断された⁸。

⁸ 同様の経路と様態の組み合わせにおいて、人が移動する場合には動詞枠付け型の *pa-* 構文は使用可能である。

- (34) a. <Um> *i~ikot* na **p<um>asok** sa kuwarto ang trumpo.
 IPFV:AV:spin LK PFV:AV:enter LOC room NOM top
 ‘The top entered the room spinning.’
- b. **Umikot* na **p<um>a~pasok** sa kuwarto ang trumpo.
 PFV:AV:spin LK IPFV:AV:enter LOC room NOM top
 ‘The top entered the room spinning.’
- (35) a. **Umikot* ang trumpo **pa-pasok** sa kuwarto.
 PFV:AV:spin NOM top PA-enter LOC room
 ‘The top entered the room spinning.’
- b. **Pa-ikot* na **p<um>asok** sa kuwarto ang trumpo.
 PA-spin LK PFV:AV:enter LOC room NOM top
 ‘The top entered the room spinning.’

さらに、*sigaw* ‘to shout’ 及び *dabog* ‘to stamp’ と *baba* ‘to go down’ の組み合わせについても、動詞
 枠付け型構文が使用される。

(36) *sigaw* ‘to shout’ + *baba* ‘to go down’ ; 並行事象構文

- a. *S<um>i~sigaw* na **b<um>aba** ng hagdan si Kevin.
 IPFV:AV:shout LK PFV:AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
 ‘Kevin went down the stairs shouting.’
- b. **S<um>igaw* na **b<um>a~baba** ng hagdan si Kevin.
 PFV:AV:shout LK IPFV:AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
 ‘Kevin went down the stairs shouting.’

-
- (i) *Pa-ikot* na p<um>asok sa kuwarto ang lalaki.
 PA-spin LK PFV:AV:enter LOC room NOM man
 ‘A man entered the room spinning.’
- (ii) *<Um> *ikot* ang lalaki pa-pasok sa kuwarto.
 PFV:AV:spin NOM man PA-enter LOC room
 ‘A man entered the room spinning.’

つまり (34d) の不適格性は単純に経路と様態の組み合わせに由るものではなく、主語の有生性に関する構文制約に原因があると考えられる。本稿ではこれ以上この問題を扱わないが、本稿が焦点を当てている様態だけでなく、移動者に関わるこうした意味的性質なども構文選択に影響を与えていることが示唆される。

(37) *sigaw* ‘to shout’ + *baba* ‘to go down’ ; *pa-* 構文

- a. *Pa-sigaw* na **b<um>aba** ng hagdan si Kevin.
 PA-shout LK PFV.AV:go.down GEN stair P.NOM Kevin
 ‘Kevin went down the stairs shouting.’
- b. **S<um>igaw* si Kevin **pa-baba** ng hagdan.
 PFV.AV:shout P.NOM Kevin PA-go.down GEN stair
 ‘Kevin went down the stairs shouting.’

(38) *dabog* ‘to stamp’ + *baba* ‘to go down’

- a. *Pa-dabog* siya = ng **b<um>aba** sa hagdanan.
 PA-stamp 3SG.NOM PFV.AV:go.down LOC stair
 ‘S/he went down the stairs stamping.’
- b. **Nag-dabog* siya **pa-baba** ng hagdanan.
 PFV.AV:stamp 3SG.NOM PA-go.down LOC stair
 ‘S/he went down the stairs stamping.’

同様に、*tawa* ‘to laugh’ と *labas* ‘to go out’ の組み合わせでも、様態ではなく経路が主動詞として実現する。この組み合わせでは、*pa-* 構文は文法的ではあるものの、少し不自然な表現となり (39c)、並行事象構文による描写がもっとも自然と判断された。

- (39) a. *T<um>a~tawa* = ng **l<um>abas** ng kuwarto ang mga bata = ng lalaki.
 IPFV.AV:laugh = LK PFV.AV:go.out GEN room NOM PL young = LK man
 ‘The boys went out of the room laughing.’
- b. **T<um>awa* = ng **l<um>a~labas** ng kuwarto ang mga bata = ng lalaki.
 PFV.AV:laugh = LK IPFV.AV:go.out GEN room NOM PL young = LK man
 ‘The boys went out of the room laughing.’
- c. ?*Pa-tawa* = ng **l<um>abas** ng kuwarto ang mga bata = ng lalaki.
 PA-laugh = LK PFV.AV:go.out GEN room NOM PL young = LK man
 ‘The boys went out of the room laughing.’

また以下の例、*tawa* ‘to laugh’ と *akyat* ‘to ascend’ (40) 及び *sigaw* ‘to shout’ と *labas* ‘to go out’ (41) というように、異なる経路との組み合わせでも同様の特徴が観察される。従って、経路の種類自体はその経路の出現位置や構文の使用可能性に関わらないということがわかる。

(40) *tawa* ‘to laugh’ + *akyat* ‘to ascend’

- a. *T* <um> *a~tawa* = ng <um> **akyat** ng hagdan ang mga bata = ng lalaki.
 IPFV:AV:laugh = LK PFV:AV:ascend GEN stair NOM PL young = LK man
 ‘The boys went up the stairs laughing.’
- b. **T* <um> *awa* ang mga bata = ng lalaki **pa-akyat** ng hagdan.
 PFV:AV:laugh NOM PL young = LK man PA-ascend GEN stair
 ‘The boys went up the stairs laughing.’
- c. ?*Pa-tawa* = ng <um> **akyat** ng hagdan ang mga bata = ng lalaki.
 PA-laugh = LK PFV:AV:ascend GEN stair NOM PL young = LK man
 ‘The boys went up the stairs laughing.’

(41) *sigaw* ‘to shout’ + *labas* ‘to go out’

- a. *Pa-sigaw* na **l** <um> **abas** ng bahay ang babae.
 PA-shout LK PFV:AV:go.out GEN house NOM woman
 ‘The woman came out of the house shouting.’
- b. *S* <um> *i~sigaw* na **l** <um> **abas** ng bahay ang babae.
 IPFV:AV:shout LK PFV:AV:go.out GEN house NOM woman
 ‘The woman came out of the house shouting.’
- c. **S* <um> *igaw* ang babae **pa-labas** ng bahay.
 PFV:AV:shout NOM woman PA-go.out GEN house
 ‘The woman came out of the house shouting.’

ここまで観察したように、偶発的な様態と経路を単節で表すとき、様態が主動詞として実現することは許されないことが明らかとなった。従ってそれらの組み合わせを単節で表現する場合、経路を主動詞として、様態を付随要素として表す必要がある。この点は、主動詞として実現することが好まれる本来的な様態と対照的である。しかしながら、こうしたパターンを示さないものも観察された。(42) が例示するように、*kain* ‘to eat’ と *punta* ‘to go’ の組み合わせは *pa-* 構文でも並行事象構文でも表現できない。

- (42) a. **Pa-kain* siya = ng **p** <um> **unta** sa eskwelahan.
 PA-eat 3SG.NOM = LK PFV:AV:go LOC school
 ‘S/He went to school eating.’
- b. ***K** <um> **ain** siya pa-punta sa eskwelahan.
 PFV:AV:eat 3SG.NOM PA-go LOC school
 ‘S/He ate while going to school.’
- c. ***K** <um> *a~kain* siya = ng **p** <um> **unta** sa eskwelahan.
 IPFV:AV:eat 3SG.NOM = LK PFV:AV:go LOC school

‘S/He went to school eating.’

以下の (43) が例示するように、この組み合わせは *habang* ‘while’ により導入される従属節を含む複雑文により表現される。こうした複雑文においては、様態と経路を表す要素はそれぞれの節において主要部として機能している。Talmy (1991; 2000) の類型論は単節における複雑事象の表現を対象とするため、この構文は当該類型論のどちらのパタンにも属さない。

- (43) *K<um>a~kain*⁹ siya habang *p<um>u~punta/pa-punta* sa eskwelahan.
 IPFV:AV:eat 3SG.NOM while IPFV:AV.go PA-go LOC school.
 ‘S/He was eating while going to school.’

第 5 節の (41) 以外の例文では、2 つの単純な事象 (例えば (39) では「女性が叫ぶ」という事象と「女性が家から出る」という事象) が、単節に統合されて表現されていると考えることができる。しかしこの (41) の例では、2 つの事象が単節には統合されず、それぞれ一つの節によって表現されている。この事実は、偶発的な様態の実現の仕方が均質的でないことを意味し、従って今後更なるデータの収集と意味論的分析が必要となる。

最後に、本節で観察したデータを纏めると以下の表 3 のようになる。

表 3 移動事象のシチュエーションと使用可能な構文

シチュエーション	構文 (類型)
DANCE + CROSS	<i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け) ; 並行事象構文 (動詞枠付け)
SPIN + ENTER	並行事象構文 (動詞枠付け)
SHOUT + DOWN	<i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け) ; 並行事象構文 (動詞枠付け)
SHOUT + GO OUT	<i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け) ; 並行事象構文 (動詞枠付け)
STAMP + DOWN	<i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け)
LAUGH + GO OUT	並行事象構文 (動詞枠付け) ; ? <i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け)
LAUGH + ASCEND	並行事象構文 (動詞枠付け) ; ? <i>pa-</i> 構文 (動詞枠付け)
EAT + GO	主節 + <i>habang</i> 従属節

⁹ 完了アスペクトの *kumain* はここで使用できず、未完了アスペクトの標示 *kumakain* となる。なお (42) の例文では未完了・完了に関わらず非文となる。

6 2つの研究のまとめ：様態の形態統語的統合度

第4節と第5節において、異なる種類の様態と経路の組み合わせがどのように表現されるかを観察した。第4節で主に観察した本来的な様態は主動詞として実現する傾向が強い。第5節で観察した偶発的な様態は多くの場合主動詞に従属する付随要素として実現するが、*kain* ‘to eat’ と *punta* ‘to go’ の組み合わせでみたように、経路とは別の節において（偶発的な）様態が実現する場合もあった。従って言語そのものを分類する Talmy の類型論を直接タガログ語に適用することはできない。しかし、特定の移動事象の描写に使用される構文の分布パターンを捉える上で、枠付け類型論による構文の特徴付けが有効であることを本節で議論する。

ここで、前節までで観察した様態の実現位置の違いを、単純移動¹⁰を表す節への、様態の形態統語的な統合度の違い (Lehmann 1988; Van Valin and LaPolla 1997) と捉えると、以下のような統合度に関する階層が提示できる¹¹。本階層は、右側に行くほど統合度が低くなることを意味する：

(44) 様態の統合度の階層

主動詞 < 付随要素 < 従属接続 < 等位接続
 (付随要素枠付け) (動詞枠付け)

等位接続の場合、様態は移動を表す節からは統語的に独立しており、従って統合度がもっとも弱い。従属接続の場合、様態は単独で一つの節の述語として機能する。しかしながら、一方の節は他方に依存しており単独では立てず、様態と単純移動が形態統語的に等位接続と比較してより高い度合いで統合されていると言える (Lehmann 1988: “hierarchical downgrading”)。また様態が付随要素として実現する場合は、節ではなく単語として、主節内部に生起する。この点で (44) の階層において、より右側に位置するものよりも統合度が高い (Lehmann *ibid.*: “syntactic level”)。ここでも様態は形式的にもアスペクト的解釈においても主動詞に依存しており、主節に完全に統合されているわけではない。そして階層のもっとも左に位置するケースでは、様態は主動詞として実現し、文全体が表現する事象のアスペクト的性質を決定する。このとき経路は接頭辞 *pa-* による派生あるいは前置詞など、ヴォイス接辞もアスペクト標示も持たない構成素として実現する。様態は他の構成素に依存しておらず、節内部に完全に統合されていると言える (Croft et al. 2010: 222)。

第4節の実験結果と第5節のデータを (44) の階層に写像すると以下の結果が得られる。

¹⁰ 移動者 (Figure)、経路 (Path)、参照地 (Ground) から構成される (Talmy 2000: 221)。

¹¹ この階層は主に Lehmann (1988) が提案する階層に基づいている。Lehmann は複数の独立した階層を立てているが、ここではそれらを統合している。また、本階層は Croft et al. (2010) が提示した階層とも類似している。2つの違いは、Croft et al. (2010) の階層が構文の形態統語的統合度であるのに対し、本研究の階層は様態表現の統合度に関わるものであるという点である。

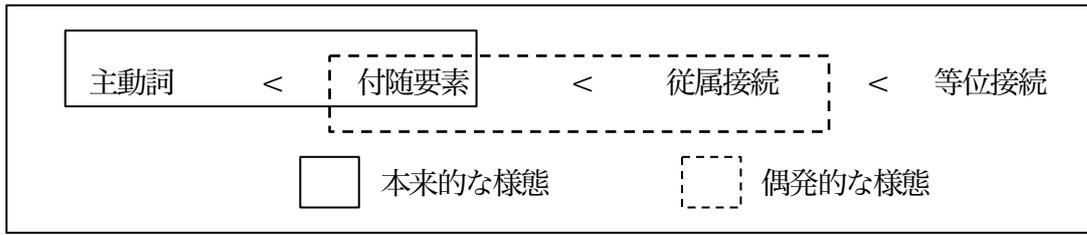


図2 様態の統合度階層とタガログ語の対応関係

偶発的な様態は形態統語的にもっとも強く統合された位置で実現することができず、付随要素として、または従属接続を含む複雑文において生起するため、階層の中間の 2 つの地点をカバーする。一方、本来的な様態は主動詞または付随要素で表現されることが可能なため、形態統語的に強い統合度を示す左側の 2 つの地点をカバーする。つまり、移動事象に対して原因という強い関わりを持つ様態は形態統語的により統合度が高い位置に生起し、こうした直接的な関係を持たない様態はより統合度の低い位置に生起するという、意味と形式の類像的な関係 (Van Valin 2005) が見られる：



図3 様態の原因性と統合度の類像性

複雑移動表現のこのような類像的な性質は、以下に引用するように Croft et al. (2010) でも指摘されている：

“more typical or natural process + result combinations in complex events will be encoded in more highly integrated morpho-syntactic constructions ...” (Croft et al. 2010:225)

Croft et al. (2010) は様態と経路の組み合わせにおける典型性が、描写に使用される構文の形態統語的統合度に影響すると述べているが、彼らが検証したシチュエーションタイプは種類が少なく、さらに典型性は言語コミュニティごとの文化に左右されうる概念であることが知られている (Enfield 2002)。従って、移動の複数のシチュエーションタイプの描写方法がどのように多様であるかを示した本研究は、彼らの主張を精緻化する上で重要なデータを提供する。

7 結論

本研究は Talmy (1991; 2000) の枠付け類型論において、タガログ語がどのように振る舞うのかを観察した。タガログ語では、動詞枠付け型と付随要素枠付け型構文の両方を移動事象の描写に使用できる。本研究では、(I) タガログ語話者がどちらの類型タイプの構文を好んで使用するのか、また (II)

その選好が異なる種類の移動表現においても一貫しているのか、という2つの問いを検証した。

異なる種類の移動表現に関して、本研究では、移動の原因であるか否かという点で2種類の様態を区別した。本来的な様態を含む移動事象を描写する場合、タガログ語話者は好んで付随要素枠付け型構文を使用する。しかし、偶発的な様態を含む移動事象の描写に同タイプの構文を用いることはできず、代わりに動詞枠付け型構文や従属接続を含む複雑文が使用される。つまり、タガログ語話者の構文選択は様態の種類に敏感であり、タガログ語の種類も移動事象の(様態の)種類によって変化する。この事実は、言語そのものを分類する Talmy の類型論をそのままこの言語に適応することはできないことを意味する。そのため本研究ではこの分類を構文レベルで応用し、それぞれの構文における様態の生起位置の違いを形態統語的な統合度の違いとして提示した。そしてその階層により、因果関係が強いほど形式的な統合度も強くなるという、意味と形式の類像的關係を指摘できることを示し、また、言語内における構文的多様性に説明を与えた。

本研究は次の2つの示唆を持つ。まず、本研究で観察された構文の分布傾向は、英語 (Allen et al. 1997) やフィリピン北部のイロカノ語 (Yamamoto 2015)、またはラオ語 (Enfield 2002) にも見られることが報告されている。従って、枠付け類型論を、構文の分布パターンを捉える枠組みとして展開できる可能性がある。今後は豊富な種類の様態の検証が必要となるとともに、様態という意味範疇の粒度の高い分析が重要である。

2つ目は、移動表現の類型論を節接続というより大きな領域の中に位置づけられるという可能性である。意味と形式の類像性は、補文や副詞節といった節接続によって表現される意味領域で指摘されてきた (Van Valin and LaPolla 1997; Lehmann 1988)。移動表現の分布が類像性という概念で捉えられるとすれば、そうした広い意味領域・階層の中に移動事象を位置づけることも可能となるかも知れない。

略号

AV-行為者ヴォイス, DIS-遠称, GEN-属格, IPFV-未完了, LK-リンカー, LOC-所格, NOM-主格, OBL-斜格, P-固有名詞, PA-接頭辞 *pa-*, PFV-完了, PL-複数, PV-被動作者ヴォイス, POT-偶発・非意図, SG-単数, 1-一人称, 3-三人称, < >-接中辞, “=”-接語化, “~”-重複

参考文献

Allen, Shanley, Aslı Ozyürek, Sotaro Kita, Amanda Brown, Reyhan Furman, Tomoko Ishizuka, and Mihoko Fujii (2007). Language-specific and universal influences in children's syntactic packaging of manner and path: a comparison of English, Japanese, and Turkish, *Cognition* 102, 16-48.

Beavers, John, Beth Levin, and Shiao Wei Tham (2010). The typology of motion expressions revisited. *Journal of Linguistics* 46, 331-377.

Croft, William, Jóhanna Bar.dal, Willem Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010).

- Revisiting Talmy's typological classification of complex events. In Hans C. Boas (ed.), *Contrastive construction grammar*, 201-235, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Enfield, N. J. (2002). Cultural logic and syntactic productivity: associated posture constructions in Lao. In Enfield (ed.), *Ethnosyntax: explorations in grammar and culture*, 231-258. Oxford University Press, Oxford.
- Himmelman, Nikolaus P. (2005). The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 110-181. London: Routledge.
- Kawachi, Kazuhiro (2014). Patterns of expressing motion events in Kupsapiny. In Osamu Hieda (ed.), *Recent advances in Nilotic linguistics*, 103-136, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.
- Lehmann, Christian (1988). Towards a typology of clause linkage. In John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.), *Clause combining in grammar and discourse*, 181-225. Amsterdam: John Benjamins.
- Matsumoto, Yo (2003). Typologies of lexicalization patterns and event integration: clarifications and reformulations. In Shuji Chiba et al. (eds.), *Empirical and theoretical investigations into language: a festschrift for Masaru Kajita*, 403-417, Kaitakusha, Tokyo.
- 長屋 尚典 (2016) タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結. 日本言語学会第153回大会予稿集, 354-359. 日本言語学会
- Schachter, P. & F. T. Otanes (1972). *Tagalog reference grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Slobin, Dan I. (1997). Mind, code, and text. In Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on language function and language type: dedicated to T. Givón*, 437-467, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Slobin, Dan I. (2000). Verbalized events: a dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In Susanne Niemeier and René Dirven (eds.), *Evidence for linguistic relativity*, 107-138, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Talmy, Leonard (1985). Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and lexical descriptions: Vol. 3. Grammatical categories and the lexicon* (36-149). Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991). Path to realization: a typology of event conflation, Proceedings of the seventeenth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society, 480-519.
- Talmy, Leonard (2000). *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*, MIT Press: Cambridge, MA.
- Talmy, Leonard (2009). Main verb properties and equipollent framing. Jiansheng Guo, Elena Lieven, Nancy Budwig, Susan Ervin-Tripp, Keiko Nakamura, and Seyda Ozcaliskan (eds.), *Crosslinguistic approaches to the psychology of language: Research in the tradition of Dan Isaac Slobin* (389-402). New York: Psychology Press.

- Van Valin, Robert D., Jr. (2005). *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla (1997). *Syntax: Structure, Meaning, and Function*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Wienold, Götz (1995). Lexical and Conceptual Structures in Expressions for Movement and Space: With Reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as Compared to English and German. In Urs Egli, Peter E. Pause, Christoph Schwarze, Arnim von Stechow, and Götz Wienold (eds.), *Lexical Knowledge in the Organisation of Language*, 301-340, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Yamamoto, Kyosuke (2015). The degree of clause integration in motion expressions in Ilocano. Presented at NINJAL International Symposium: Typology and Cognition in Motion Event Description. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan. 24 January, 2015.

受理日 2017年4月10日